

囀る、光の粒

星のまたたきが、地上にかすかな風をよび、
それは さざ波のようにおとずれる。ほんとうに
自身さえ気がつかない間に、
軀の中にわずかに蓄えられていた言葉までもさらわれ、
流れ出ようとする。いったい何処へ。幾千夜の月の満ち欠けや
幾筋かの流星が予感を連れて走り去っていくのを
眺めているかのような、長い月日の上に漂っている。
ときおり、胸の奥底から突き上がってくるかたまりには
言葉のような匂いがしたが、どれも

それらを和らげる効力はなく、嗚咽となって出ていくばかりだった。
波に洗われ、採集してきた煌めく破片も とどめておくことは
かなわなかった。とじられていたものは自然とひらかれ、こぼれ落ち、
すぐさま 見知らぬものが一挙に押し寄せ、何かを揺り起こしているよう。
朝だよ、起きて、ねえ起きてよ。
起きているよ！
いえいえ、まだ眠っているでしょう、起きて。
ある朝の攻防のように。
(寝ているとか起きているなんて誰が判断するのだろう)

鳥は夢のなかでも飛んでいる
彼らは疑わない、朝や夜や夢や現を。
そして 問いたささない、あらゆる言葉をつり上げて、

貯蔵庫にしまうひとのように。

囀る、時空の缶詰をあけるように、細かに翻しながら。

あの鳴き声が運んでくるものに、どれだけの光の粒が凝縮されているか
気づくまでに、こんなにも多くの時間が用意されていた。

今は、そのはじける粒に、崩れかかる私をとどめておいてと希うばかり。
いつそ崩れて、とけるのか、ひろがるのか、無くなるのか
みとどけるのもひとつの必然。

隙をみて、眠りこむ。大きな揺籃でゆられながら

眠ってしまえば、私はもう何処にもいなかった。揺り起こされ、

かえってくれば、私はそこかしこにいた。くりかえし、くりかえし
波になる、波になる、

音さえ忘れて、波になる、ただ 波になる

ようやくやってくる、足音がある。波頭を蹴り上げながら

わりと乱暴に、自棄になりながらでなければやっていられない

とでもいうように。これは祝祭なのでしょう、あなたの、

宣誓に付帯する祝祭なのです。ほどかれ、むずばれる

絶えず交わされる約束なのです。宣誓につづく宣誓、

大きく口を開けながら囀る鳥のように、私たちは宣誓につづく宣誓、
忘れませんように、あの光のなかですすみ出た日を

ようやくやってきた、トラスの出入口に。ひるむことなく

臆することなく、ただ目を閉じ、旋回する、ああ

何処かで鳥の声がする、囀る、光の粒、これは祝祭、

待ち望んだ祝祭。捻られながら遠のいていく

祝祭の後の言い難い沈黙。光の粒は軀にまとい付き

わずかに、一粒、一粒、はじけながら

潮の匂いを懐かしんでいく。どうか とじないで、
収斂に向かい落ち着こうとする言葉のように。
ひらかれながら、ひらかれながら、